

去る二十五日夜、聖市の日本本樂部が内山新總領事に對し歎會を開催したる時其の席上同領事は、答辭を兼ね希望を示し「團體生活には小異を捨てゝ同時に附く事と、公の爲めに有利と我儘を控へる事の必要なるを説かれたるが、新總領事にして此の言あるは特に味はない」とある。

△一事一言△

急務なる
日本宣傳

急務なる日本宣傳



Zoólicas do Brasil

30 de Julho de 1931 No. 718

日曜木曜日第13月7年6和昭

柳生十兵衛の巻(四)

これこそ澤庵禪師が教へて柳生流の兵法に至つた禪味である。眼がつと開いた境地である。かうしてゐては勝負に果しない。さう氣が付いたか十兵衛の咽喉元へ付けた太刀を右足半歩退くと共に右斜めにぐいと引く。

カユミあるチキモノには

ビシノール軟膏には

すは。事を起すと見て取つた甚五右衛門、相手の打太刀の出鼻を究く戸田流得意の神業をえいッ。

その氣合に引つかむやうに十兵衛の裂帛の氣合も聞えたが、甚五右衛門そんなことは顧慮する暇がない。眼にも止まらぬ木剣、風を切つてビュッ、十兵衛の横脇へ美事に飛んだ。然しそれより近くか、遙か、稻妻の如き十兵衛の速い木剣は、ビシリッと音を立てて甚五右衛門の肩に下つた。

トランホームには

【タカ點眼鏡】

甚五右衛門によろくとなつて危く尻餅を擱く所であつた。「參つた」。

甚五右衛門がまづ云つたが明らかに相打ちと思つたのに、十兵衛からは何の言葉もない。

五、相打でないとあらばもう一本

非禮である……と甚五右衛門は心に思つた。

「もう一本お願ひ申す」。

面上を少しく赤くして云へば、「宜しい、さア參れ。」

如何にも落付いた十兵衛、また大様である。將軍御指南番一萬二千石の家の娘子であれば、場合が場合と

「これはまた柳生先生のお言葉」

とも思はれませぬ、二度の勝負致し方がないが、場合が場合と

「あいや、柳生先生暫らく。」



て甚五右衛門甚だ不愉快である。今度は甚五右衛門必勝の氣に満ちて要心堅固の下段に構えた

「左様思ふか、まだ心眼を開けのである。」

「何んでござります。」

「お言葉ではござりますが、私は相打とより外どうしても考へられませぬ、それを専私の負

のは武道の名折れでござる、たとてつて勝を御主張なさら、真剣を以つて今一度の勝負を頼りたまに申されではこの儘に過されるされ」

「大守は催促された心地仕方な

は頗る針を含んでゐる。」

庭前から甚五右衛門大聲に叫ん

と観察されぬとも限らぬのである。

「いや、荒尾氏、御心配無用でござる。強つて望まれて辭退しに上つて詰寄る。十兵衛これに左衛門に發したもので、中々手段方法に富んでゐる。この『浦の波』と云ふ太刀などは正法とは云ふのみで云ふ太刀筋、するべく敵に寄り込み、左を打つと見せて、咄嗟の間に右に轉じて打ちを入れるのである。」

この戸田流は中條流の富田五郎

に上つて詰寄る。十兵衛これに

左衛門に發したもので、中々手

段方法に富んでゐる。この『浦の

波』と云ふ太刀などは正法とは云

ふて云つた。

「うむ、兩人とも天晴であつた。」

「太守は催促された心地仕方な

は、太守池田忠雄の方に向

つて云つた。

「うむ、兩人とも天晴であつた。」

「太守は催促された心地仕方な

は、太守池田忠雄の方に向

つて云つた。

「それではこの勝負を矢張り相

打ちと御覽せられるか。」

「殿、御覽せられました。」

「面に上つて詰寄る。十兵衛これに

左衛門に發したもので、中々手

段方法に富んでゐる。この『浦の

波』と云ふ太刀などは正法とは云

ふて云つた。

「うむ、兩人とも天晴であつた。」

「太守は催促された心地仕方な

は、太守池田忠雄の方に向

つて云つた。

「うむ、兩人とも天晴であつた。」

「太守は催促された心地仕方な

は、太守池田忠雄の方に向

つて云つた。

「それではこの勝負を矢張り相

打ちと御覽せられるか。」

「殿、御覽せられました。」

「面に上つて詰寄る。十兵衛これに

左衛門に發したもので、中々手

段方法に富んでゐる。この『浦の

波』と云ふ太刀などは正法とは云

ふて云つた。

「うむ、兩人とも天晴であつた。」

「太守は催促された心地仕方な

は、太守池田忠雄の方に向

つて云つた。

「うむ、兩人とも天晴であつた。」

「太守は催促された心地仕方な

は